



4. 疾病予防・アレルギーへの配慮

① 疾病予防

実習前には様々な事柄に対する注意が必要ですが、そのなかで疾病^{しっぺい}予防とはどのような意味をもつのでしょうか。疾病とは、疾患ともいいますが、ようするに病気のことです。病気には多数のものがああります。大人も病気をしますが、大人がかかる病気と子どもがかかる病気は少しその様子が違います。子どもでは病原体の侵入による感染症が重要です。予防とは病気にかからないようにするという意味ですが、実習前に心がけなければならない疾病予防とは、様々な感染症にかからない、そして人にうつさないということを意味しています。

種々の病原体が進入してきて、体がそれに対して反応する過程のなかでしめす表現を症状といい様々なものがありますが、病原体の数だけ感染症にも種類があります。子どもは多くの病原体をそれぞれ経験している最中なので、症状が出てくる回数が多いこととなります。大人も年に何回か風邪症状をしめすことが普通であろうと思います。風邪というのは、急性上気道炎ですが、実に多数のウイルスが同じような症状を引き起こします。大人でもすべてのウイルスに対しては、十分な免疫がついているわけではないために、年に何回か風邪をひくのです。一方でしっかりと経験した病原体に対しては、すでに免疫状態になっているため、たとえその病原体が体に進入してきたとしても、明らかな症状とならず、したがって進入された（感染した）ことに気づかないことすらあります。しかし、その病原体に未経験な人には、濃厚な接触によってうつすことがあります。実習の間は、子どもたちとの密な接触が日常的に行われます。細心の注意を払って、子どもたちに感染症をうつすことのないようにしなければなりません。

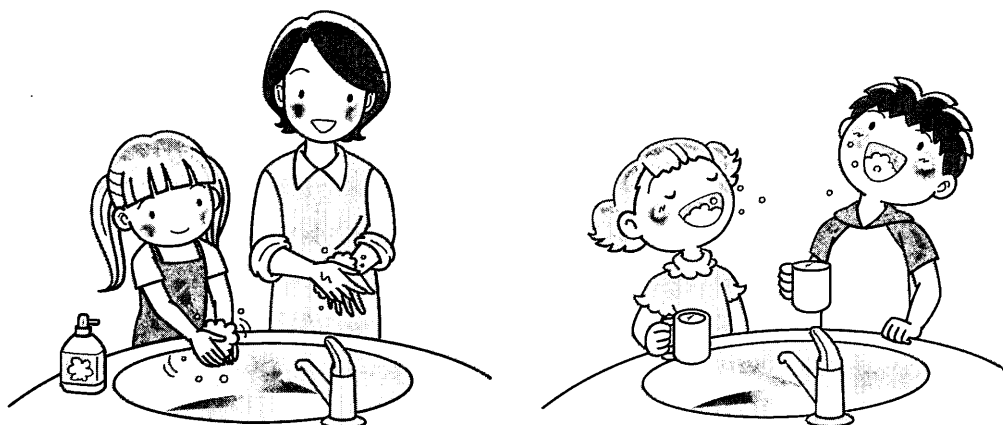
*01 細菌検査

保育実習に際して、検便を行います。人間の便の中には無数の細菌が共存しています。ときにそれらの細菌の中で、病原性をもつものが知らないうちに増えていることがあります。便の検査（細菌検査）で調べる菌は、赤痢菌、チフス菌、病原性大腸菌（とくにO-157）です。これらの菌に感染すると、多くの場合は大人でも下痢症状を起こします。なかには症状が軽くてあまり意識をしなかったけれど実は便中に菌を排出しているという場合があります。そうすると、人へうつす可能性がでてきます。本人は気づかないような軽い症状でも、子ども、とくに乳幼児では重い症状となることもあるため、病原性をしめす細菌が便中にいないことはしっかりと確かめておく必要があります。このように細菌検査はとても重要な意味がありますので、実習の前に必ず検査の結果が出ていなければなりません。

★02 日頃の注意

多くの感染症は、手指に病原体がついているとあちらこちらを触ることで環境中に広がり、それが口の中に入ることです。これを経口感染けいこうかんせんといいます。また、せきやくしゃみをすることで、微細な飛沫が空気中に飛び散り、その粒子を吸いこむことで感染します。これを飛沫感染ひまつかんせんといいます。さらに、病原体が空気中に漂っている微粒子に付着して、または病原体そのものが浮遊して、それを吸いこむことで感染します。これを空気感染くうきかんせんといいます。このように直接ふれることから吸いこむことまで感染のルートは複数ありますが、それらを防ぐためには（人にうつさないようにするためには）よく手を洗うこと、うがいをする、これにつきます。うがいは頻繁にしなければ意味がありません。少なくとも朝、昼、夕方と行うようにし、とくにトイレの後の手洗いは十分にしなければなりません。

実習前から自分自身の体調管理は普段以上に気をつけておく必要があります。たとえばインフルエンザの流行期には、自分自身の体温測定も毎日行い、体温の上昇に注意を払いましょう。また、これまでどのような予防接種を受けているかの再確認が必要です。予防接種で防げるはずの感染症にかかって、それをまた子どもたちにうつすことがないように配慮が必要です。



② アレルギーへの配慮

アレルギー性の疾患は、子どもたちの間で珍しいものではなく、なんらかのアレルギー疾患は10人に1人以上みられます。乳幼児で多いアレルギー疾患は、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、そして気管支喘息ぜんそくです。実習中に接する子どもたちに、このような疾患がある場合、どのように接していけばよいのか、あらかじめそれらの疾患に関して一定の知識が必要でしょう。

★01 食物アレルギー

厚生労働省の研究班による食物アレルギーの定義は以下のようです。

「原因食物を摂取した後に免疫学的機序を介して生体にとって不利益な症状（皮膚、粘膜、消化器、呼吸器、アナフィラキシーなど）が惹起じやうきされる現象¹⁾」

この免疫学的機序という部分は多くの場合、その食物中の抗原に対して特異 IgE 抗体（免疫グロブリンの一種で、即時型アレルギー反応のとき、抗原と結合していろいろな症状を引き起こす）をもっていることで証明されます。同じ食物を摂取すると、ほぼ同じ症状が出てくる場合には、検査をしなくても一応その食物に対してアレルギー反応をしめしていると解釈できます。症状のうちで一番問題となるものは、アナフィラキシーとよばれるものです。これはじんましんが出るとか、皮膚が赤くなる、という皮膚の症状、そしてせきが出る、あるいは声がかすれる、息が苦しいというような呼吸器の症状が同時に出る、つまり、からだの二つの臓器に同時に症状が出る場合をいいます。皮膚と呼吸器の組み合わせもあれば、消化器（腹痛や下痢、嘔吐など）と呼吸器の組み合わせもあります。そのアナフィラキシーの最重症のものは、血圧が下がり意識ももうろうとしてくるアナフィラキシーショックといわれるものです。

保育所や幼稚園では、通園している子どもたちのなかで、どの子が食物アレルギーをもっているかはあらかじめわかっていることが多いので、園での食事やおやつのときに、一定の注意をするよう、実習のときには指導されると思います。それを確実に守る必要がありますが、少なくともどの食物に対して反応するのか、反応があるためにいわゆる除去食をどの程度行っているのか、指導の先生の指示をしっかりと守ることが必要です。個々の例で、除去食の程度も違います。完全除去から部分除去まで様々ですので、指示を受けた場合、その内容を十分に把握しておくことが重要です。

★02 アトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎は、ともかくかゆいのが特徴です。かゆみという感覚は、かくことによってますます強まります。物事に集中していると忘れていますが、何かの拍子に感じると無意識にかき、それが次のかゆみを引き起こします。かくことを止められればよいのですが、制止することはほぼ不可能です。しかし、ある程度かいたところで気をそらすようにしむけることは可能です。また、かゆい場所を冷やすと一時的にかゆみがおさまります。

★03 気管支喘息

気管支喘息は、急にせきが出たり、ヒューヒューと喘鳴が聞こえ、息をすることが苦しい発作をしめします。そのような発作は、運動をすることで明らかになることがよくあります。しかし、それに対して運動をさせないという対応をするのではなく、その子の状態にあった運動をさせるというように考えるのがよいでしょう。もしも息が苦しい発作が出たときには、それまでの行動をいったん中断させ、座らせ、少量の水を与え、息を効率よく吐けるようにリズムをとってあげることがよいでしょう。また、すぐに指導の先生に状況を伝える必要があります。

引用文献

- 1) 主任研究者 海老澤元宏 国立病院機構相模原病院臨床研究センターアレルギー性疾患研究部「食物アレルギーの診療の手引き 2008」厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・進展・重症化の予防に関する研究